

ヤスイ・ニクイの意味決定に關与する 名詞句の意味役割

鈴木基伸

要旨

本稿では、日本語の難易構文に用いられるヤスイ・ニクイを取り上げ、それらの意味決定に關与する要因について考察を行う。これまでの研究では、ヤスイ・ニクイの解釈には「意志性」「格配列」が關与するとされてきた(井上 1976、佐藤 1988)。それらの要件は例文から帰納的に導き出されたものであるため整合性を持つように見える。しかしながら実際には先行研究で提示された規則からは外れるものもあり、新たな解釈に關わる要件が必要だといえる。そこで本稿では、ヤスイ・ニクイが動詞に接続することから、ハおよびガによって繋げられる名詞句には、動詞との關わりから導き出される意味役割が備わることに着目した。そしてその意味役割がヤスイ・ニクイの解釈に影響を及ぼしていることを主張した。またヤスイについては意味役割が【動作主】である場合には「傾向」の解釈に、【非動作主】である場合には「容易さ」の解釈になること、ニクイについては、【動作主】である場合には「抵抗感」、【非動作主】である場合には「困難さ」が表されることも併せて主張した*。

キーワード：ヤスイ・ニクイ、意志性、格配列、意味役割、性質の帰属先

1. ヤスイ・ニクイが表す意味

形容詞性接尾辞¹ヤスイ・ニクイは、前項動詞が表す動作や変化に対し、それらを実現させる、または実現する上でどの程度の「容易さ」「困難さ」があるのかを表す形式で

* 本論文は、日本語学会第146回大会での発表(2013年6月於茨城大学)がもととなっている。

1 益岡・田窪(1992)参照。

ある。

- (1) このキーボードは打ちやすい。
- (2) 泥道は歩きにくい。
- (3) 安物のおもちゃは壊れやすい。
- (4) 腰痛は治りにくい。

(1)(2)は「動作の難易」を表すものであり、「打つ」「歩く」という動作の遂行が容易、困難であること、また、それに関わる要素（この場合は手でマークされている「キーボード」「泥道」という動作遂行上の道具や経路）が「打つことが容易」「歩くことが困難」という性質を持つことが表されている。一方(3)(4)は「壊れる」「治る」という非意志的変化動詞にヤスイ・ニクイが付加されている例であり、「安物のおもちゃ」「腰痛」という題目名詞にとって、「壊れる」「治る」という変化が「容易に起こる」「なかなか起こらない」ということが表示されている。これらは「変化の難易²」を表している。

このように、ヤスイ・ニクイが意志動詞につく場合には「動作の難易」が、変化動詞につく場合は「変化の難易」が表されるわけだが、出来事の難易は事態発生の頻度にも影響を及ぼす。動作や変化の難易度が高ければ高いほどその出来事の成立頻度は低くなり、反対に低ければ低いほど高くなるといえる。例えば、「利き手で箸を持つ」ことは、「利き手とは反対の手で箸を持つ」ことよりは難易度が低いといえるが、この場合、当然「利き手で箸を持つ」頻度の方がそうでない場合に比べ高くなる³だろう。出来事の難易度とその頻度には因果関係があることは明らかである。それゆえ、難易構文においても頻度は表される。

- (5) ご飯を食べるときは利き手を使いやすい。
- (6) 富山の冬は雪が降りやすい。

(5)(6)は「利き手を使うことが簡単だ」「雪が簡単に降る」という「動作・変化の容易さ」ではなく、「利き手を使うことが多い」「雪がよく降る」という「頻度の高さ」が表されている。このように、難易構文を用いて「頻度の高さ」が表されることもある。

2 井上(1976)参照。

3 もちろん出来事遂行・成立の難易度がその頻度につながらない場合もある。例えば、漢字の使用はひらがな・カタカナの使用よりも難易度が高いといえるが、人物名や地名を表記する際に漢字のかわりにひらがなやカタカナを用いることが一般的であるとはいえない。

これらはヤスイ文の例であり、Vヤスイによってその動作・変化の「頻度の高さ」が表されているわけであるが、ニクイによっても「頻度の低さ」は表される。

(7) 人はだれでも自分の欠点に気づきにくいものだ。

(日本語記述文法研究会 2009 : 146)

(8) 沖縄の冬は雪が降りにくい。

(7)(8)はそれぞれ、「自分の欠点に気づくことが少ない」、「なかなか雪が降らない」という頻度の低さを表している解釈になる。このように、ヤスイ・ニクイは「頻度の高さ・低さ」という出来事の「傾向」をも表す。

また、出来事の難易は「抵抗感」にもつながる。ここでいう抵抗感とは、動作の難易度に伴い、その動作を遂行することが「憚られる」という感覚を持つことを指す。遂行の難易度が高い動作の場合、それが低い出来事に比べ、実現させる上で必然的により多くの肉体的・心理的労力が伴う。例えば事故によって右腕を怪我した場合、怪我した右腕を使うことは怪我をしていない左腕を使うことよりも難易度が高い。その理由にはうまく右腕を動かせない、右腕を使うと痛い、などがあるだろう。その結果、怪我をした本人は右手を使うことに対して抵抗感を感じ、「右手を使うことが憚られる」と思うことは極めて自然な感情の流れだといえる。したがって、「傾向(頻度の高さ・低さ)」と同様、動作に対する「抵抗感」も、出来事の難易と因果関係があり、それはニクイによって以下のように表示される。

(9) 怪我をしているので右手を使いにくい。

(9)のように、肉体的苦痛によって抵抗感を感じる場合もあれば、心理的苦痛によって感じる場合もある。

(10) 課長は何を言っても否定するから、相談しにくいよね。

(11) 一方的に批判されたので、いにくくなって逃げ出しました。

(以上、日本語記述文法研究会 2009 : 148)⁴

このように、肉体的・心理的理由によって動作に対する「抵抗感」を感じていることも

4 日本語記述文法研究会(2009)は、この用法を「内的困難さ」と称しているが、本稿では「抵抗感」として統一する。

難易構文を用いて表される⁵。

「抵抗感」があることはニクイによって表され、「抵抗感」がないことはヤスイによって表される。

(12) 先輩は優しいので相談しやすい。

(13) ここには友達しかいないので非常にしやすい。

ただし既に述べたように、ヤスイには動作の「傾向」を表す用法があり、そのような解釈が成立する場合には、「抵抗感のなさ」の解釈に優先される。

(14) 怪我をしてない手の方を使いやすい。

(14) は、「怪我をしてない手の方が使うことが多い」という傾向を表しているとして解釈でき、「怪我をしてない手の方を使うことに対して抵抗感を感じない」という意味にはならない。したがって、ヤスイにおいても「抵抗感のなさ」は表されるが、「傾向」の読みが成立する場合にはそちらが優先されるのである。

以上のことから、ヤスイ・ニクイは難易構文に用いられる形式であるが、出来事の「容易さ」「困難さ」のみならず、「傾向」や「抵抗感(の有無)」をも表す。また、「抵抗感」は、ヤスイによってもニクイによっても表されるが、ニクイにおいて「傾向」の解釈が成立する場合にはそちらが優先されるのであり、「抵抗感」を表す用法を主に担っているのはニクイだといえる。これらはヤスイ・ニクイの機能・用法上の非対称性を表しているといえるだろう。難易構文の用法をまとめると以下のように示すことができる。

表1. ヤスイ・ニクイが表す意味

	ヤスイ	ニクイ
難易	容易	困難
傾向	頻度が高い	頻度が低い
抵抗感	ない ※「傾向」が成立する場合はそちらが優先される	ある

5 「抵抗感」が生じるのは、意志的に動作を行う場合に限定される。したがって、非意志的な変化に対してこのような解釈が生じることはない。

2. 問題の所在

前節でヤスイ・ニクイの用法をまとめたが、ここで問題となるのは、それぞれの解釈がどのような条件で成り立っているかという成立要件についてである。井上（1976）は、ヤスイにおける「容易さ」と「傾向」の違いは、意志性の有無によるとし、意志性がある場合は「容易さ」、意志性がない場合は「傾向」の意味になると述べている。また後者において、補文⁷で他動詞が用いられている場合、目的語をマークするヲ格はガ格へと昇格⁸せず、ヲ格（斜格）のまま残存すると述べている。

(15) 私には、この種の誤植を見つけやすい。

(16) 近頃私は、誤植を見落とすやすくなりました。 (以上、井上 1976)

(15) の構造は「誤植を見つける＋ヤスイ」であり、補文「誤植を見つける」は意志性があり（＋意志）、「この種の誤植を見つけることが容易だ」という動作の「容易さ」が表されている。その際、補文におけるヲ格はガ格へと昇格している。(16) は「誤植を見落とす＋ヤスイ」であり、補文「誤植を見落とす」で示されているのは、意志的に行われるものではない非意志的動作である。この場合は「誤植を見落とすことが多い」という「傾向」が表されている。そして(16)では(15)と異なり、補文におけるヲ格はガ格へと昇格せず、ヲ格のまま残存している。

井上（1976）はヤスイにおける「傾向」の成立要件として非意志性のみを挙げており、格の残存は結果的に生じるものだとして述べているが、佐藤（1988）は、意志性があっても格が残存する場合は「傾向」の解釈が成立すると述べ、格交替の有無が「容易さ」と「傾向」を分ける解釈上の要因であることを指摘している。

(17) 歩道のある通りのほうが安全なのはわかっているが、人はつい近道を歩きやす

6 井上（1976）は、意志性が無い動作のことを「主語が制御できない動作」と称している。

7 「太郎はだましやすい」は構造的には「太郎をだます＋ヤスイ」である。この場合「太郎をだます」が「太郎はだましやすい」という難易構文の補文である。

8 難易文は、補文で用いられている格がそのまま使用される場合と、ガ格へと交替する場合、またハによって主題化される場合がある。

(i) 太郎をだます。

(ii) 太郎をだましやすい。

(iii) 太郎がだましやすい。

(iv) 太郎はだましやすい。

加藤（2008）は、ガ格とそれ以外の斜格（ヲ格、テ格など）に階層関係を認め、斜格から主格への交替を昇格、主格から斜格への交替は降格とした。また、昇格、降格が起らなければそれらの格が残存しているとした。本稿でも加藤（2008）の用語を踏襲する。

い。

(佐藤 1988)

(17) における補文「近道を歩く」は意志的動作であるため、井上 (1976) の主張に基づけばその解釈は「容易さ」となるはずであるが、実際には、「歩くことが多い」という「傾向」の解釈になっている。この理由について佐藤 (1988) は、補文のヲ格がそのまま残存しているためだと述べている。そしてその論拠として、補文のヲ格を昇格させガ格にした場合に「難易」の解釈が成立することを挙げている。

(18) この道が車が少なくて歩きやすい。

(佐藤 1988)

以上のことから、先行研究におけるヤスイ解釈のキーワードは、①意志性の有無、②格交替 (昇格・残存) だといえるが、それらについてはいくつか問題がある。まず、井上 (1976) が提示した動作の意志性であるが、当該動作の意志・非意志を厳密に認定することは実はそれほど容易なことではない。以下の例を参照されたい。

(19) 好きな色を選びやすい。

(20) 利き手を使いやすい。

(19) (20) における「選ぶ」「使う」は意志動詞であるため、動詞単独で見れば意志性があるといえるが、「好きな色を選ぶ」「利き手を使う」という補文レベルではそれらを無意識に行っている場合も考えられる。したがって出来事全体としては意志性があるものとして捉えることは適切ではない。しかしながらまったく意志性がないかといえどもとも言い切れないため、(19) (20) においてヤスイでマーク (標示) されている補文の内容に対して意志性の有無を截然と区別することは難しい。(19) (20) のヤスイは何れも「難易」ではなく「傾向」として解釈されるが、それらが意志性のなさから生じていることなのか、それとも格の残存によるものなのかが判然としない。このように、ヤスイの解釈に意志性が関与するのであればその「意志性の有無」の判断が重要になるが、それが容易でないことが問題だといえる。

また、佐藤 (1988) が言及している格交替についてであるが、佐藤の主張とは反する例、つまりヲ格が残存していても「傾向」の解釈にならず、「難易」の意味になる場合がある。

(21) 河川敷の会場は風が吹き抜け、たこを揚げやすい。

(朝日新聞：2013年1月21日)

補文「たこを揚げる」には明らかに意志性が認められる。しかしながら補文におけるラ格はヤスイ文においても残存しているため、佐藤（1988）の主張に基づけば「傾向」の解釈になるはずである。しかしながら実際には「たこを揚げることが容易だ」という動作遂行の「容易さ」が表されている。このような例を、残存格の使用が意味に影響されていないと捉えるべきなのか、それとも影響はあるが、意志性が優先されて「難易」の解釈が成立されていると考えるべきなのかは判断が分かれるところであろう。

先行研究を概観してみると、ヤスイの解釈について以上のような疑問が生じる。また先行研究では述べられていないが、主にニクイにおいて「抵抗感」が表されるという、ヤスイ・ニクイの機能上の非対称性がなぜ存在するのかという疑問も残る。さらに、ニクイ文の意味がどのような場合に「困難さ」「抵抗感」が表され、それらが区別されるのかという解釈の成立要件についても未だ考察されていない点である。本稿では、これらの問題について、これまでの分析方法とは異なった観点から取り組んでみることにする。

3. 本稿の主張と仮説の提示

本稿では、これまで指摘されてきた意志性、格交替からは一旦離れ、ヤスイ・ニクイが形容詞的性質を持つという点に着目して議論を進めたい。まず、ヤスイ・ニクイは元来形容詞（「やすし」「にくし」）であったものが接尾辞化したものであるため、ヤスイ・ニクイも当然形容詞と同様の機能を持つ。形容詞は叙述的に用いられ、副助詞ハや格助詞ガによってマークされた名詞句の性質を表す。以下に形容詞文とヤスイ文を例示する。

- (22) 太郎はかっこいい。
- (23) ここのラーメンがおいしい。
- (24) 赤ちゃんは転びやすい。
- (25) 花子が泣きやすい。

(22～25)における「かっこいい」「おいしい」「転びやすい」「泣きやすい」という形容詞句は、名詞句「太郎」「ここのラーメン」「赤ちゃん」「花子」と副助詞ハもしくは格助詞ガで繋がれ、その性質を表示している。ただし、(24)(25)はヤスイ文であるため、「赤ちゃんが転ぶ」「花子が泣く」という補文が含まれている。したがって「赤ちゃん」「花子」は「転ぶ」「泣く」の動作主でもある。ここで(22)(23)の形容詞述語文と(24)(25)のヤスイ文とで違いが明確になる。つまり、「かっこいい」「おいしい」は、「太郎」「ここのラーメン」の性質を表すが、それらの名詞句には意味役割は含まれない。

しかしながら、(24) (25) における「転びやすい」「泣きやすい」は「赤ちゃん」「花子」の性質を表すが、それらの名詞句には、動詞との関わりから導き出される【動作主】という意味役割を持つのである。

名詞句の意味役割には【動作主】以外に【対象】【受益者】【道具】【場所】などがあるが、ヤスイはそれらの【動作主】以外の意味役割を持つ名詞句の性質を表す場合もある。以下に、名詞の意味役割が【対象】【道具】となっている例を示す。

(26) このかばんは持ちやすい。

(27) このコップが飲みやすい。

(26) (27) の補文はそれぞれ「このかばんを持つ」「このコップで飲む」であるから、「このかばん」は「持つ」の【対象】、「このコップ」は「飲む」の【道具】である。ここで、(24) (25) と (26) (27) における意味の違いを確認する。(24) (25) は、「赤ちゃんは転ぶことが多い」「花子は泣くことが多い」という解釈となり、「傾向」が表されている。一方、(26) (27) では、「このかばんを持つことが容易だ」「このコップで飲むことが容易だ」となり、「容易さ」が表されていると解釈できる。つまり、(24) (25) と (26) (27) とではヤスイの解釈が異なる。この原因について、これまでは意志性の有無から説明がなされてきたわけだが、本稿では、名詞句の意味役割の違いに着目したい。たしかに、(24) (25) と (26) (27) は意志性の有無という点から分類することが可能であるが、両者は名詞の意味役割という点でも異なっている。(24) (25) の名詞句の意味役割は【動作主】であり、(26) (27) では【対象】【道具】である。後者の意味役割を【非動作主】という枠組みでくくれば、(24) (25) と (26) (27) の名詞句の意味役割の違いを、【動作主】 vs 【非動作主】という対立によって示すことができる。

以上のことから本稿では、ヤスイ・ニクイが出来事内における【動作主】の性質を表しているのか、【対象】【道具】などの【非動作主】の性質を表しているのかという区別が、両形式の解釈に関係すると考え、それについて仮説を立てて検証を行う。尚、ヤスイ・ニクイが何の性質を表しているかという問題は、ヤスイ・ニクイが表す性質の帰属先がどこか、ということに換言できるため、以下では「性質の帰属先」をキーワードに議論を行う。以上をふまえてまずヤスイの解釈規則について次のような仮説を立てる。

(28) ヤスイが表す性質の帰属先名詞句の意味役割が【非動作主】である場合は「容易さ」の解釈に、【動作主】である場合は「傾向」の解釈になる。

ニクイについてはヤスイの議論を終えた後に行う。次節では本仮説の検証を行う。

4. 仮説の検証

本稿が提示した仮説の論拠となった例文を再掲する。

- (29) 赤ちゃんは転びやすい。 (24) 再掲
 (30) 花子が泣きやすい。 (25) 再掲
 (31) このかばんは持ちやすい。 (26) 再掲
 (32) このコップが飲みやすい。 (27) 再掲

ここで用いられている動詞は「転ぶ」「泣く」「持つ」「飲む」である。「転ぶ」「泣く」は一般的に意志性が無いと考えてよく、「持つ」「飲む」には意志性がある。また補文は、(29) (30) が「赤ちゃんが転ぶ」「花子が泣く」、(31) (32) が「このかばんを持つ」「このコップで飲む」である。これらは何れも表面上は項（名詞句）を一つしかとっていないが、出来事レベルで考えれば他動詞が用いられている (31) (32) の補文には動作主が必要となるため、実際には「Xがかばんを持つ」「Xがこのコップで飲む」となる。したがって (31) (32) の補文は必然的に項を2つとることになる。

(29) (30) と (31) (32) では、前者が [-意志] で「傾向」を、後者が [+意志] で「容易さ」を表しているから、この例文だけでは先行研究で述べられている意志性を基にした規則からは逸脱していない。意志性ではなく、名詞句の意味役割がヤスイの意味に影響していることを立証するためには、意志性があることが明らかであっても、ヤスイの帰属先名詞句の意味役割が【動作主】である場合には、「傾向」の解釈が成り立っていることを確認しなければならない。また、(31) (32) のように、補文内に名詞句が2つ以上あり、それぞれの意味役割が【動作主】【非動作主】である場合に、ヤスイの帰属先を【動作主】にする場合と、【非動作主】にする場合とでは意味が異なることを確認しなければならない。さらにそれが【動作主】である場合には「傾向」、【非動作主】である場合には「容易さ」の解釈が成立していなければならない。

ではまず、意志性が明らかに認められ、帰属先の名詞句が出来事の【動作主】である場合についてどのような解釈が成立しているかをみる。初めに、名詞句の数が一つの場合（自動詞）を観察する。

- (33) ?次郎が踊りやすい。
 (34) ?花子が走りやすい。

これらの補文は「次郎が踊る」「花子が走る」であり、何れも [+意志] の出来事である。

また、「踊りやすい」「走りやすい」は動作の主体である「次郎」と「花子」の性質を表しているため、ヤスイが表す性質の帰属先名詞句の意味役割は【動作主】である。この場合単独では不自然さが残るが、以下のようにすれば多少は意味がとりやすくなる。

(35) ? 太郎より次郎が踊りやすい。

(36) ? 弘子より花子が走りやすい。

依然として不自然さは残るものの、ヤスイの意味をとろうとすると、「容易さ」というよりは「傾向」の解釈に傾く。つまり、(35)は「太郎よりも次郎にとっての方が踊ることが簡単だ」というよりは、「太郎より次郎の方が踊ることが多い(踊りだすことが多い)」という解釈になる。また(36)も同様に、「弘子よりも花子にとっての方が走ることが簡単だ」というよりは、「弘子よりも花子が走ることが多い(走りだすことが多い)」という意味にとれる。このことから、ヤスイが動作主の性質を表している場合、補文が表す事態がたとえ[+意志]であっても、「容易さ」ではなく「傾向」の解釈が成立していることが確認できる。

次に、補文内に名詞句が複数ある場合(他動詞)について考察を行う。既に(31)(32)で述べたように、「このかばんを持つ」「このコップで飲む」には動作主が必要となるため、実際には項が2つ存在する。「このかばん」「このコップ」という【非動作主】にヤスイの性質が帰属する場合、「容易さ」の意味になることは既に(26)(27)で確認した。では、ヤスイの帰属先が【動作主】となる場合どのような解釈が成立するであろうか。補文における【動作主】がヤスイの帰属先になるためには、【動作主】である名詞句をハまたはガでマークすればよい。そしてその場合、【対象】【道具】である「このかばん」「このコップ」は、ヤスイの帰属先として解釈されないよう、補文において用いられる斜格は残存させる必要がある。以下に例を示す。

(37) 太郎がこのかばんを持ちやすい。

(38) 花子がこのコップで飲みやすい。

形容詞が表す性質の帰属先となるのは副助詞ハもしくはガ格でマークされた名詞句であり、ヲ・デによってマークされる名詞句はヤスイが表す性質の帰属先にならない(ヤスイが「このかばん」「このコップ」の性質を表していることにはならない)。したがってこの場合、「持ちやすい」「飲みやすい」は「太郎」「花子」の性質を表している。そして同時に「太郎」「花子」は補文における動作の主体であるため、【動作主】という意味役割を持っている。では(37)(38)の意味がどうなるかといえば、「容易さ」ではなく

「傾向」を表していると解釈できよう。(37)は「太郎にとってこのかばんを持つことが容易だ」というよりは、「太郎がこのかばんを持つことが多い」という意味に、(38)は「花子にとってこのコップで飲むことが簡単だ」というよりは、「花子がこのコップで飲むことが多い」という意味に可能である。それは以下のように【動作主】他の動作主と対比させることで、より明確になる。

(39) 次郎より太郎がこのかばんを持ちやすい。

(40) 弘子より花子がこのコップで飲みやすい。

このことから、補文内に名詞句が2つある場合、帰属先の名詞句を【動作主】にした場合には「傾向」の解釈に、【非動作主】にした場合には「容易さ」の解釈になっていることがわかる。これは、(28)で述べた仮説に一致するものである。

5. ニクイの意味と帰属先名詞句の意味役割との関係について

これまでヤスイ文のみ観察をしてきたが、ニクイ文についてはどうであろうか。前節での検証作業から、ヤスイにおける解釈と名詞句の意味役割との関係には因果関係があると考えてよい。以下では、ニクイが帰属する名詞句の意味役割と解釈との関係について観察する。まず、自動詞が用いられるニクイ文を例示する。

(41) ?太郎が踊りにくい。

(42) ?花子が走りにくい。

これらは文脈なしにはやや不自然であるが、何れも解釈を試みれば、動作遂行上の物理的な「難しさ」よりも「抵抗感」があらわされているように読み取れる。つまり、「太郎にとって踊ることが難しい」「花子にとって走ることが難しい」ではなく、「太郎は踊ることに抵抗感を感じている」「花子は走ることに抵抗感を感じている」と解釈できる。これはヤスイの時と同様、動作主を他の動作主と対比させることによりいくぶん自然になる。

(43) 次郎より太郎が踊りにくい。

(44) 弘子より花子が走りにくい。

次に他動詞が用いられている例を観察する。

- (45) このかばんが持ちにくい。
- (46) このコップが飲みにくい。
- (47) 太郎がこのかばんを持ちにくい。
- (48) 花子がこのコップで飲みにくい。

(45) (46) は【対象】【道具】という意味役割を持った名詞句の性質がニクイによって表されている例であり、(47) (48) ではニクイが表す性質の帰属先が【動作主】になっている例である。この場合、(45) (46) は「持つことが困難だ」「飲むことが困難だ」という「困難さ」の解釈になる。一方(47) (48) では、「太郎」「花子」が「このかばんを持つこと」「このコップで飲むこと」に対して抵抗感を感じているという解釈が成立する。これまでの考察をまとめて以下のように提示する。

- (49) ニクイが表す性質の帰属先名詞句の意味役割が【非動作主】である場合は「困難さ」の解釈に、【動作主】である場合は「抵抗感」の解釈になる。

6. 難易的性質が帰属する意味役割

これまでの検証作業によって、ヤスイ・ニクイが表す性質の帰属先名詞句が持つ意味役割と難易構文の解釈には相関関係があり、それは、【非動作主】である場合には「容易さ(ヤスイ)」「困難さ(ニクイ)」が表され、【動作主】の場合には「傾向(ヤスイ)」「抵抗感(ニクイ)」が表されることがわかった。本節では、この名詞の意味役割がなぜヤスイ・ニクイ文の解釈に影響するのかについて考察を行う。

何らかの動作・行為に対する「容易」「困難」という難易の評価は、色彩に用いられる「白い」「黒い」などとは異なり、主観的かつ相対的だといえる。ゆえにその評価は普遍的なものではありえず、個々の「経験者」(Experiencer)によってなされるものである。「経験者」は、動作の主体(動作主)であり、かつ評価を下す主体でもある。Kuroda (1987) は、「経験者」は「に」「にとって」でマークされ、動作に関わる要素(対象物、道具、環境など)に対して評価を下すと述べている。以下の例を参照されたい。

- (50) 私 {に／にとって} おにぎりは作るのが容易だ。 [対象物に対する評価]
- (51) 太郎 {に／にとって} この靴は走るのが困難だ。 [道具に対する評価]

この中で、経験者である「私」「太郎」は「おにぎり」「この靴」に対して「作るのが容易」「走るのが困難」という評価を下している。この関係は以下のように示すことができる。

(50) 「私」による評価：[おにぎり=作るのが容易]

(51) 「太郎」による評価：[この靴=走るのが困難]

この関係が成り立つのは、経験者（評価者）である「私」「太郎」が、自分以外の何かに対して評価を与えている場合である。もし経験者とその評価の対象が一致してしまう場合には以下のようになり、それらは不自然となる。

(52) ??私はおにぎりをつくるのが簡単だ。

（「私」による評価：[私=おにぎりを作るのが難しい]

(53) ??太郎はこの靴で走るのが難しい。

（「太郎」による評価：[太郎=この靴で走るのが難しい]

つまり、難易の評価が成立するためには「経験者（評価者）≠評価の対象物」という関係が成り立っていないなければならない。本稿が提示した仮説及びその検証作業を通して、ヤスイ・ニクイが表す性質の帰属先名詞句の意味役割が【動作主】である場合、その解釈は「難易」以外の意味（「傾向」「抵抗感」となっていた。これは同時に、ヤスイ・ニクイが【動作主】の性質を表している場合、「難易」の解釈は成立してないということである。なぜ「難易」の解釈が成立しないかといえば、ヤスイ・ニクイの性質の帰属先が【動作主】となる場合、「動作主（経験者）=評価の対象」という関係になってしまい、「難易」の評価が成立する条件から外れてしまうからだと考えられる。したがって、難易構文において「動作主=評価の対象」となったときに「傾向」や「抵抗感」が表されるのは、文法性を保ったまま解釈が成立するよう「難易」ではない別の解釈が必要となり、その結果それらが選択されたためであると考えられる。

7. 格配列について

佐藤（1988）は、動作の意志性に関わらず斜格が残存する場合はヤスイが「傾向」の

9 「難易」以外の解釈として選択された意味がなぜ「傾向」であり「抵抗感」であるのかということについて考察する必要があるが、それは別稿に譲る。

意味になるとしたが、それは格の影響ではなく名詞句の意味役割の影響によるものであると本稿では考える。格を交替させることによってヤスイ・ニクイが表す性質の帰属先を切り替えられるため、一見格配列が解釈に影響していると考えがちであるが、どの格が使用されているかは表面的なものでしかなく、重要なのは名詞の意味役割である。つまり、たとえ補文における斜格が残存していても、性質の帰属先が【非動作主】である場合には、ヤスイは「容易さ」が表され、「傾向」の読みにはならない。以下に例を示す。

(54) 学べば、食の業界は職を得やすい。 (朝日新聞：2013年1月22日)

(55) 首都圏のある私立大の学長は、「センター利用入試は、優秀な学生を確保しやすい」と説明する。 (朝日新聞：2013年1月25日)

(54) (55) の補文は「職を得る」「優秀な学生を確保する」である。これらのヲ格はヤスイ文においても保持されている。つまりヲ格は残存しているわけだが、その解釈は「職を得ることが容易だ」「優秀な学生を確保することが容易だ」となり、「傾向」ではなく「容易さ」が表されている。(54) (55) におけるヲ格の残存によって、ヤスイの帰属先が【動作主】になっていれば、「傾向」の読みが生じているであろうが、この場合、「得やすい」「確保しやすい」の帰属先は「食の業界」「センター利用入試」であり、共に【非動作主】である。つまり、ヲ格は残存しているものの、性質の帰属先名詞句が【非動作主】であるため「容易さ」の解釈が成立しているのである。

これはもちろんニクイでも同様のことであり、斜格が残存するから「困難さ」以外の意味が生じるわけではなく、あくまで重要なのは名詞の意味役割である。以下の例は、ヲ格が残存して、「困難さ」ではなく「抵抗感」が表されている例である。

(56) 受験シーズンが近付き、四国で18店舗を展開するパン店「ウィリーウィンキー」(高松市)が、「合格パン」を販売している。(中略) 東谷崇弘店長は「『合格』の文字を食べにくいという受験生もいますが、食べてこそ力もつきます。勉強中の腹ごしらえや夜食にどうぞ」と話す。 (朝日新聞：2010年1月6日)

補文は「『合格』の文字を食べる」であり、そのヲ格はニクイ文においても残存している。この場合ニクイの意味は「『合格』の文字を食べることが困難だ」ではなく、「『合格』の文字を食べることに抵抗感を感じる」ということである。これは、ヲ格が用いられているからそのような意味になっているのではない。この場合、「食べにくい」の帰属先は明示されていないが、文脈から、動作主である「受験生」となる。つまり、性質の帰属先が【動作主】となっているため、「困難さ」以外の「抵抗感」という解釈が生じて

いる。次に、(56) 同様ヲ格が残存しているものの、「困難さ」が表されている例を示す。

(57) 斎藤敦園長も「普段使っている紙の練習帳では、一人ひとりの書き順をチェックしにくい、アプリだと書き順どおり書けるようになる」。

(朝日新聞：2013年1月23日)

(57) は補文が「一人ひとりの書き順をチェックする」であり、そのヲ格は残存している。この場合、「チェックしやすい」は「紙の練習帳」の性質を述べているのであり、その意味役割は【道具】であり、【非動作主】である（「紙の練習帳で一人ひとりの書き順をチェックする」）。したがって(57)は、ヲ格が残存しているという点では(56)に等しいが、ニクイの帰属先名詞句の意味役割が異なっている。そして(57)の解釈は(56)におけるような「抵抗感」ではなく、「(園長にとって)書き順をチェックすることが困難である」という「困難さ」が表されており、意味役割の違いが解釈の違いに表れていることがわかる。

8. まとめと今後の課題

本稿では、日本語難易構文に用いられるヤスイ・ニクイに焦点を当て、その解釈に関わる要因について考察を行ってきた。先行研究で述べられている意志性の有無や、格の交替は、例文から帰納的に導き出される要素であるが例外も多く、ヤスイ・ニクイの解釈と本質的に関与しているとは言い難かった。そこで本稿では、ヤスイ・ニクイが動詞に接続することから帰属先名詞句には動詞との関連から生じる意味役割が備わっていることを指摘した上で、それらの意味役割がヤスイ・ニクイの解釈に影響を及ぼしていることを主張するため仮説を立て検証を行った。検証を通じて本仮説は今のところ破綻を来していないため、これまでの意志性・格配列に代わるヤスイ・ニクイ解釈の要件の一つとして認めることができる。

本稿では触れなかったが、ヤスイ・ニクイ文においては格交替の可否、つまり、ガ格からヲ格、ヲ格からガ格という交替が可能な場合と不可能な場合がある。その可能な場合と不可能な場合では何が異なるのかについてはまだ議論されていない。また、ガ・ヲ交替が可能であったとしても、両者を用いた場合の意味の違いは具体的に何なのかという問題についても手つかずのままだといえる。この格交替可否の問題、それに付随する意味の問題については、本稿がヤスイ・ニクイ解釈の要件に挙げた帰属先名詞句の意味役割という観点から分析が可能であると考えられるが、それについては今後の課題とする。

参考文献

- Inoue Kazuko (1978) "'Tough sentences' in Japanese." *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, ed. by John Hinds and Irwin Howard, pp.122 – 154.
- Kuroda Shige-yuki (1987) "Movement of Noun Phrases in Japanese." *Issues in Japanese Linguistics*, ed. by Takashi Imai and Mamoru Saito, pp.229 – 271.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (上)』大修館書店.
- 加藤重広 (2008) 「日本語の構文における昇格と降格」『日本語受動構文の構造的意味と推意に関する語用論的原理の記述的研究』 pp.129 – 146.
- 佐藤ちえ子 (1988) 「難易文の派生について」『文経論叢』24 弘前大学人文学部 pp.69 – 88.
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法2』くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版.
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語文法—意味と使い方』角川書店.